

研究課題	ノスタルジアが自尊感情と幸福感に与える影響の検討		
氏名	品田 瑞穂	所属 総合教育・学校心理分野	職名 准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講		<input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること	
<p>【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>○研究の背景と目的 ノスタルジアとは、過去の記憶を思い出した際に生じる、感傷的かつポジティブな感情である。近年、欧米においてノスタルジアを経験することは、社会的つながりの感覚を強め、自尊感情や幸福感といったポジティブ感情を高めることが実証的に示されている（Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006 など）。しかし、日本人を対象とした研究では、ノスタルジア感情を喚起することによって自尊感情が高まるという効果は認められていない。また、日本における研究では、ノスタルジア感情の喚起が社会的つながりの感覚を強めるという知見が再現されていない。本研究では、これらの文化差に対して一貫した説明を行うために、社会的つながりの感覚および自尊感情の概念の文化差に着目した。文化心理学においては、日本をはじめとする東アジア文化圏においては、他者との絆を人生における重要な目標とする相互協調的文化が優勢である。このことから、日本においては、1) ノスタルジア感情の喚起は、自己が他者と暖かく親密な関係を築くことができるという観点からの自尊感情、すなわち対人的自己効力感を高める、2) 対人的自己効力感が高まることで幸福感が高まるという仮説を立て、心理学実験による検討を行った。</p> <p>○研究の方法・主な結果 東京学芸大学の学部生70名（男性18名、女性52名）を対象として、一要因参加者間計画の実験室実験を行った。実験参加者は統制群またはノスタルジア喚起群のいずれかにランダムに割り振られた（各35名）。統制群では、日常的なありふれた出来事を一つ想起・記述してもらった。ノスタルジア喚起群では、先行研究（長峰・外山, 2018 など）を参考にして、ノスタルジアを「過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的（センチメンタル）な気持ち、切ない気持ちになること」と説明し、ノスタルジックな出来事を想起・記述してもらった。その後、すべての参加者に対して質問紙を配布し、社会的つながりの感覚、対人的自己効力感、主観的幸福感について回答してもらった。</p> <p>統計的分析の結果、対人的自己効力感の一部の因子「友人への信頼・安定感」の平均値は統制群よりもノスタルジア喚起群で有意に高くなっていた。つまり、ノスタルジックな出来事を思い出すことによって、他者との関係構築に対する自己効力感が向上するという仮説1) を支持する結果が得られた。仮説2) に関しては、ノスタルジックな出来事の喚起と幸福感の間に直接の因果関係は見られなかったが、ノスタルジックな出来事の喚起が社会的つながり感を高め、社会的つながり感が幸福感を高めるといった結果が得られた。</p> <p>○本研究の成果 本研究の検討によって、ノスタルジアの心理社会的機能が文化によってなぜ異なるのかに関して一貫した説明を提供することができた。また、ノスタルジックな感情による対人的自己効力感・幸福感への影響がみられた。これらの成果から、対人的・心理的健康を高める手段として、ノスタルジックな感情の喚起の有効性が示唆された。</p>			
<p>【研究成果発表方法】</p> <p>本研究の成果は、心理学の主要な学会である日本心理学会第84回大会（2020年9月開催）において発表することを計画している。また、並行して学術論文として成果をとりまとめ、学術誌（心理学研究）に投稿することを予定している。この雑誌は査読付学術雑誌であると同時にインターネット上で一般に全文が公開されているため、採択された場合には、記憶と感情に関する学術研究の発展に寄与するだけでなく、研究成果の社会還元が可能になる。</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。